Global Service Learning 体験記

●活動先国：フィジー
●活動期間（実際の現地滞在期間）：西暦 2025 年　7 月～　2025 年　8 月
●学部・学科：人文学部　ヨーロッパ文化学科
●参加時の学年：2 年

異文化、知らない土地の中で自分を成長させたいという思いから、フィジーでの３週間のチャイルドケアボランティアに参加しました。現地では地元のインターナショナルスクール(小学校)、系列の幼稚園(３歳～５歳)、託児所(０歳～２歳)で子どもたちの学習や遊びのサポートを行う中で、多様な文化や価値観に触れる機会を得ることができました。

日本人にとって馴染みのないフィジーですが、主にフィジー系の住民とインド系の住民が暮らしていることから、あらゆる文化や宗教、価値観が尊重され共存しています。実際に、街中やバスの中で、見ず知らずの人がフレンドリーに挨拶や声をかけてくれることが日常的にありました。(滞在先の近くに日本人学校があったためか、日本語で話しかけてくれる方もいました。)
また、フィジーの文化として「フィジータイム」という特徴的な時間感覚があります。人との関係や心の余裕を優先するという価値観から、物事は必ずしも定刻通りではなくゆったりと進む場合が多く、効率や時間厳守を重要視する日本の文化との違いを感じました。
デジタル機器やインターネット環境が完全には整っていない環境だからこそ、人々が直接的な関わりを大切にしており、結果的にその温かさが社会全体に表れていることを実感すると同時に、携帯電話に依存しがちな日本での生活を考え直すきっかけとなりました。

活動先では子どもたちの年齢や発育に合わせて、毎日異なるアクティビティを行う必要があり、折り紙や書道、けん玉、日本の童謡といった日本文化の紹介のほか、日本から持参したフルートや打楽器を用いた音楽演奏を行いました。子どもたちが笑顔で日本文化や音楽に触れている姿を目の当たりにし、文化や言語の違いを超えて人と繋がることの喜びを強く感じました。同様に、英語が流暢でなくとも自分の考えや意図を伝えようとする積極性が重要であると日々の子どもたちとの関わりや、先生方とのコミュニケーションの中で痛感しました。

“Bula！”(フィジー語のこんにちは)

この一言だけで繋がることができる。
フィジーでの研修を通して、言葉や文化の違いを超えて人と関わるためには、語学力に加えて主体的な姿勢と他者を尊重する態度が不可欠であることを学びました。今後はフィジーで得たこれらの学びを、自身の専攻しているヨーロッパ文化への理解に生かしていきたいです。